

学習支援に対する取組について

—教職員対象 エンジョイ黎明館における講座内容・方法改善—

久木田 昌 之

1 はじめに

学習支援講座エンジョイ黎明館「学習支援のための鹿児島県の歴史と文化」は、黎明館の常設展示を通して鹿児島県の歴史と文化について学ぶとともに、学校における児童・生徒の郷土学習や総合的な学習の時間を支援するための黎明館の活用の在り方について、学校教職員と学芸担当職員とが、対話と連携を深める機会とすることを目的に、平成15年度から始まった事業である。

これまでも教育普及・学習支援といった立場から、黎明館だけでなく多くの博物館で取り組まれてきたことであるが、平成20年3月28日に新しい学習指導要領（幼・小・中）が公示され、改正の概要の中に次のようなことが書かれている点に着目すれば、日々子どもたちに直接関わる教職員にこれまで以上に郷土理解を深め、授業に生かしていただく必要性を感じる。

教育基本法及び学校教育法の改正により明確となった教育理念を踏まえ、学校教育においては、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国の郷土を愛し、公共の精神を尊び、（中略）。これを踏まえ、伝統や文化に関する教育や道徳教育、体験活動、環境教育等を充実したこと。



◆小学校

「我が国の代表的な文化遺産や縄文時代の生活など、我が国の伝統や文化についての学習の充実」

◆中学校

「様々な伝統や文化、宗教に関する学習を充実」

また、社会科の改訂の概要の中に、伝統や文化についての学習の充実が出されたことは特筆すべきことであろう。つまり、これまで以上に、子どもたちに我が国の伝統や文化を学ばせる必要があると考える。そして、その根幹とすべき郷土理解ができるようにするためには、鹿児島県の歴史と文化が詰まった黎明館にある資料を教職員により深く理解してもらい、そこで学んだことを授業に活用してもらうことが必要である。また、博物館の学芸専門員として、教職員にどのような講座を開講していくかを再度考えてみるよい機会であるのとらえたのである。

以上のことから、黎明館で従来行われてきた学習支援講座エンジョイ黎明館の講座内容・方法に改善を加え、教職員がより本県の歴史や文化を主体的に理解できるようにしたいと考えた。

そこで、私が担当している『鹿児島の中世』の分野で、小学校教師であった経験を生かし「自分ならこの講座でどんなことを知りたいか、やってみたいか。」という視点から考えてみた。

2 本講座の内容（大枠ではこれまでの内容を踏襲した）

- (1) 黎明館の概要・利用の方法（免除申請，展示案内制度，事前研修会）について
- (2) 黎明館の常設展示内容と展示資料について

本年度は(2)の内容・方法の改善を図ることにした。

3 本講座の内容・方法の工夫 ～教育普及の視点から方法改善を～

小・中学校の教師が授業創造をするために，歴史史料をどのように理解し，教師自身が資料や発問をどのように作成していくかということを中心に，講座の内容・方法改善を加えることにした。

『鹿児島の中世』の分野における講座の流れは以下の通りである。

- 1 時代区分としての中世について
- 2 大きくとらえた中世の特色
- 3 「中世の鹿児島」とは（※ 概略と展示史料の説明）
 - (1) 島津氏領国の形成
 - ① 島津荘と正八幡宮領
 - ② 関東武士の入部と島津氏の発展
 - ③ 島津氏の三州統一・九州制覇の夢
 - (2) 外来文化の窓口
 - ① 大陸との交易
 - ② 鉄砲とキリスト教の伝来
 - ③ 朝鮮出兵と薩摩焼
 - (3) その他（「薩南学派の興隆」について）

これまでも行われていた学習支援講座「エンジョイ黎明館」の内容



方法：講義形式

- 4 常設展示史料を生かした授業づくり（演習）～「蒙古襲来絵詞」を活用～
 - (1) 授業の具体例（学習指導案，板書計画を基に）
 - (2) 演習用のワークシート例を基にした記述の仕方の説明
 - (3) グループごとのワークシート作成及び発表
 - (4) 担当学芸専門員による講評

本年度，改善を加えたのは上記の「4」である。そこで，「4」での取組を，以下に述べていくことにする。

(1) 授業の具体例（学習指導案、板書計画を基に）～『蒙古襲来絵詞』（複製）を活用～

① 「蒙古襲来絵詞」に知的好奇心を



『蒙古襲来絵詞』は、肥後国の御家人竹崎季長が自分の武功を描いたもので、蒙古襲来全体の全体像を描いたものではないが、当時の状況を描いたものとしては唯一、中世の武士の思想・武器・防塁等をうかがい知る史料である。

後巻の絵十五は、大宰少式経資及び薩摩国島津下野守久経、その舎弟久長兵船出撃の図で、弘安の役における島津軍兵船出撃の場面である。

しかし、この史料を提示し、いきなり島津久経について子供たちに説明をするのではなく、特に小学生の場合、まず、子供なりにこの史料を読み解かせることが大切である。鹿児島の子供たちなら、資料にある「十文字」は見逃さないであろう。そこから、発達段階に応じて、ここに出てきている人が誰で、何をしているのかを調べさせたい。

つまり、史料の中にいる島津氏をきっかけに、『蒙古襲来絵詞』に知的好奇心を抱かせ、それが描かれた背景や人々の営みについて考えさせて行くことが大切である。

② 教師自身の見方・考え方に意識改革を

しかし、今のままでは、蒙古襲来における島津氏に対する好奇心のみで、認識教科としての社会科の目標は達成できない。ここで、薩摩国守島津久経などの鎮西御家人の思いに強く共感させることで、文永・弘安の役という歴史的事象をより理解させることができる。

そこで、今回は、以下の二つの資料を付加することで、久経等鎮西御家人の思いに共感させる手立てを講じた。

ア 鎮西御家人が見た海、風景



イ 作り上げた石築地の高さ
(実際の高さに拡大)



この石築地を造った武士（鎮西御家人）は何を考えて、向こうから攻め入る蒙古襲来を見ていたのか？

【復元された生の松原石築地】

ア. この資料は、『蒙古襲来絵詞』（複製，原史料宮内庁蔵）の中にある鳥津下野守久経自身に子どもたちになりきらせて，当時の様子をその人々の立場から考えさせようとするものである。黎明館の歴史史料をそのまま「何の史料」か理解させることも大切なことではあるが，その史料を活用して，当時の人々の思いに馳せることができるような資料提示や発問へと繋げていくという視点を小・中学校の教師にもっていただこうと考えたのである。このような歴史史料の見方・考え方は，歴史の楽しみ方の一つであると言え，生涯学習の一環としても有効であると考えられる。

③ 構造的な板書を



第6学年 社会科学習指導案

○組 男子 ○名 女子 ○名 計○名
指 導 者 久 木 田 昌 之

1 小単元 源頼朝と武士の世の中
2 小単元について

子どもたちは，これまでに源頼朝をはじめとする貴族の華やかなくらしや源氏物語などの活躍について調べることを通して，京都に都が置かれた頃の政治の様子や，国風文化が盛ったことについてとらえてきている。このような学習をしてきている子どもたちは，貴族の力が衰退した後の世の中の動きや武士のくらし，文化に関心をもち，原因を追究したいという意欲が高まってきている。

そこで，本小単元では，鎌倉幕府の政治や武士のくらしの様子，文化などを追究する活動を通して，源頼朝が鎌倉に幕府を開き，武士による政治が始まったことや，幕府の力が全国に及ぼうとする様子をとらえさせようとするものである。そして，このような武士を中心とした世の中の意識が固まっていこうとする中で，武士の気風が表現された力強い文化が生まれたことにも気付かせるようにする。さらに，年表や地図，文書等を活用し，鎌倉時代の特色や幕府と武士の因果関係を当時の人々の苦しみと関係付けながら考える力やそれを分かりやすく説明する力を高めたり，当時の武士の精神に共感させながら，我が国の歴史や伝統を大切にすることを育てたりしようとするものである。このような学習は，足利氏を中心とする政治で大きくくらしの様子，今日のくらしにつながる要素をもつ町文化を追究する学習へと発展していくものである。

源平の戦いを経て改権をつかんだ源頼朝は，京都から離れた鎌倉の地に幕府を開き，武士による政治の確立を目指していった。武士による政權を強固なものにするために，平民のような貴族のくらしに溺れず，武士を中心とした政治の仕組みと，御家人との間に「御恩」と「奉公」という強固な支配関係を築いていった。御家人たちは，幕府から恩恵を受け，手柄に応じて新たな恩恵を受けようとするから武士に勤め，戦など「いき鎌倉」という時は，京來を帯びて命がけで戦うと共に，自分の土地を「一所懸命」の精神で必死で守っていた。このような中で，武士の気風を醸成した力強い文化が生まれていく。

そこで，ここでは，武士による政治が始まったことをよりよく理解させるために，源平の戦いや鎌倉幕府の始まり，元寇を取り上げていく。その際，幕府が政治の仕組みを整え，全国的に力をもつ過程について，都野の方をええる武士のくらし，鎌倉時代の文化を補充として一律に付加することにする。歴史的出来事や文化について地図などを活用して追究し，地理的な見方，考え方もできるような学習活動を取り入れ，それぞれの因果関係を考えさせていくことにする。

そのために，まず，年表や源平合戦の勢力分布図を基に，源平の戦いでの中流盛や源頼朝等の行動に着目させ，貴族社会が崩壊し権力が平氏から源氏へと移行していった経緯をとらえさせる。そして，鎌倉時代の守護の分布図を取り上げ，幕府の力が全国に及んでいく事実を基に，「鎌倉幕府は，なぜ力を強めていくことができたのか」という問題意識をもたせ，幕府の政治の仕組みや武士のくらしの様子，この時代の文化の特色について追究したいという意欲を高めたい。

次に，一人一人の予想を基に，自分なりの見方・考え方を生かした追究計画を立てさせ，年表や地図，地図等の資料を基に，自分なりに気付いたことを「政治」「くらし」「文化」の3つの観点からグループや全体で話し合わせる。その中で，貴族社会の学習で学んだ絵巻や文書，文書等の資料の見方や地図の見方，その資料を基に互いに考えを吟味し合う力を発揮させながら事象同士の関連に気付くことができるようにする。さらに，この過程で得た考えを整理，再構成し，地図や年表にまとめさせる中で，武士による政治の基盤が確立される時代についての見方・考え方を高めようとするものである。

このような学習を通して，子どもたちは武士による鎌倉幕府の支配や武士のくらしぶり，鎌倉文化の特色などが分かる楽しさや喜びを味わいながら，自分の追究を，補強・強化・修正する力を高めたり，我が国の歴史や伝統についての関心と理解を深めたりすることになる。

この板書の特徴は，概念を二分化し，黒板の右半分には鳥津久経も参加した警固番役が，「土地を守る」という鎌倉時代の鎮西御家人の熱い思いに直結することを明確にしている。

このように，子供の思考の流れに沿った板書計画をつくっておくと，本館展示場にある史料も授業においてより効果的なものになってくる。

教材研究から板書計画に至るまでの流れを示した学習指導案も資料として添付することで，本講座修了後に，受講者である教師が，追試しようとする際の手助けになるように配慮した。

(2) 演習用のワークシート例を基にした記述の仕方

エンジョイ黎明館 平成 30 年 7 月 29 日

鹿児島の中世 ワークショップ資料

単元名

使用する史料名

史料をどう使うか

子どもはどう変わるか

- ① 活用する史料名（黎明館常設展示から選択）を書き込む。
- ② その史料をどのように使うとよいかを書き込む。（当然，ここには授業のねらいが基になる。）
- ③ その結果，どんな子どもになるか，どんな子どもを目指すのかを書き込む。
- ④ 歴史事象に対する認識を深めさせるための補助資料もあれば書き込む。
- ⑤ グループごとに，作成した授業案を発表する。
- ⑥ 担当学芸専門員による講評を行う。

左のワークシートの記入方法を具体的に示すために，これまで述べてきた『蒙古襲来絵詞』を例に上記の①～④の流れで説明を行った。



記入方法の説明後，常設展示場に行き，実際に授業創造をしてもらった。

その際，展示場にある史料を満遍なく見ていただくために，小学校・中学校の教師が一つの班に混在するように事前に班編制を行い，互いの校種の子どもたちの発達特性の情報交換をしながら活動できるように配慮した。さらに，初めて目にする資料がほとんどであるという実態から，展示史料一覧表も提示した。

鹿児島中世 年表

全国	西暦	和暦	鹿児島関係
このころ源氏物語成る	1010	寛弘7	
藤原頼通關白就任	1019	寛仁3	
	1020	寛仁4	南蛮の賊徒が薩摩国を侵す
	1026	万寿3	このころ、平季基が島津荘を開発する
	1034	長元7	高麗人が大隅国に漂着する
前九年の役	1051~62	永承6~康平5	
後三年の役	1083~87	永保3~寛治元	
院政始まる	1086	応徳3	
	1140	保延6	このころ阿多郡司阿多忠景が勢威を振る
守護・地頭設置	1185	文治元	島津忠久が島津荘の下司となる
鎌倉幕府成立	1192	建久3	
九州諸国に大田文作成	1197	建久8	薩摩・大隅・日向三州の図田帳ができる
承久の乱	1221	承久3	
貞永式目制定	1232	貞永元	
	1248	宝治2	相模国御家人渋谷氏一族が薩摩に下向する
文永の役	1274	文永11	
	1275	建治元	守護島津久経が下向し異国警固にあたる
弘安の役	1281	弘安4	
南北朝分立	1336	延元元・建武3	
室町幕府成立	1338	延元3・應徳元	
	1342	興国3・康永元	征西將軍懐良親王が薩摩の谷山本城に着く
	1356	正平11・延文元	足利義詮が島津貞久の薩摩・大隅守護を承認する
	1374	文中3・応安7	島津氏久が明へ使者を送る
南北朝合一	1392	元中9・明徳3	
金閣創建	1397	応永4	
	1402	応永9	幕府が島津伊久に鎮西賊船の渡明者処罰を命ずる
勘合貿易始まる	1404	応永11	
応仁の乱	1467~77	応仁元~文明9	
	1471	文明3	幕府が島津立久に、琉球渡航船を統制させる
	1478	文明10	桂庵玄樹が鹿児島に至り大学章句を刊行する
銀閣創建	1489	延徳元	
	1535	天文4	島津勝久が島津実久に敗れ清水城を去る
	1536~39	天文5~8	島津忠良・貴久父子が島津実久を破る
	1543	天文12	ポルトガル人が種子島に漂着し鉄砲を伝える
	1549	天文18	ザビエルが鹿児島に上陸しキリスト教を伝える
	1550	天文19	島津貴久が鹿児島に移り内城（大龍小の地）を築く
新開地の戦い	1560	永禄3	
室町幕府滅亡	1573	天正元	
	1577	天正5	伊東義祐皇後に去り島津氏がほぼ三州を統一
	1581	天正9	島津義久が南浦文之を招く（薩南学派全盛時）
太閤検地始まる	1582	天正10	
パテレン追放令	1587	天正15	豊臣秀吉軍薩摩に進攻
	1588	天正16	島津氏の旧領をほぼ承認する
刀狩令	1588	天正16	
秀吉全国統一	1590	天正18	
文禄の役おこる	1592	文禄元	島津義弘が秀吉の命を受け朝鮮に出兵する
	1594	文禄3	
慶長の役おこる	1597	慶長2	秀吉の命により石田三成が三州の検地を実施
	1599	慶長4	伊集院忠輝討たれし忠真が叛す（庄内の乱）

<参考資料>

- ・鹿児島中世年表
 - ・展示史料一覧表
- （一部掲載）

鹿児島の中世 展示史料

コーナー	展示番号	資料名	資料種	展示内容
島津荘と 正八幡宮領	1	管窺愚考	写真	かんざぐこう
	2	右近衛府録	文書	うこのえふちょう
	3	百足村并済使補任状	文書	もびきむらべんざいしふにんじょう
	4	薩摩国建久図田帳写	文書	さつまこくけんきゅうずでんちょう
	5	八幡正宮補任状	文書	はちまんしょうぐうぶにんじょう
	6	大隅正八幡宮印	実物	おおすみしょうはちまんぐういん
	7	主な荘園分布想定図	パネル	おもなしょうえんぶんぶそうていず
	8	中世島津氏略系図	パネル	ちゅうせいしまつりやくけいず
関東武士の入部と 島津氏の発展	9	島津忠久像	掛軸	しまつただひさざう
	10	前右大将家政所下文	文書	ぜんうだいししょうけまんどころくだしふみ
	11	関東下知状写	文書	かんとうげちじょううつし
	12	源頼朝下文	文書	みなもとのよりともくだしふみ
	13	薩摩国日置北郷下地中分絵図	掛軸	さつまこくひおぎほんごうしたじちゅうぶんえず
	14	日置北郷下地中分線付近の現況	パネル	ひおぎほんごうしたじちゅうぶんせんふんごんのげんきょう
	15	島津荘薩摩方伊作荘并日置北郷領家地頭和与状	文書	しまつしおさつまかたゐさくさへひおぎほんごうりやうわいじょう
	16	関東下知状	文書	かんとうげちじょう
	17	鎮西下知状	文書	ちんせいげちじょう
	18	沙弥行智願状	文書	しゃみやぎょうちぎぜんじょう
	19	関東御教書	文書	かんとうみぎょうしょ
	20	蒙古襲来絵詞	絵巻	もうこしゅうらいえことば
	21	伝肝付兼重下賜綿旗	実物	でんきもつぎかねしげかきぎんぎ
	22	高山本城之図	絵図	こうやまほんじょうのず
	23	南朝方谷山氏の軍旗	実物	なんちやうがたにやましのぐんぎ
	24	足利高(尊)氏書状写	文書	あしかがたかうしよじょううつし
	25	征西將軍官令旨	文書	せいせいしやうぐんかんりやうじ

4 おわりに

本年度の取組は、これまでの展示史料を通した鹿児島県の歴史理解に加え、小・中学校の教師が授業創造のために、教師自身が、黎明館にある歴史史料をどのように見て、どう理解し、そして授業提示用の資料や発問をどのように作成していくかを改善の視点として考えていった。

その結果、次のような成果と課題が得られた。

<受講者の感想より> (◎：改善の成果、△：今後の課題)

- ◎ 工夫を凝らしたサービス満点の教養講座であった。
- ◎ もっと黎明館を生徒の学習の場にさせたいと思った。
- ◎ 自分の知識不足を感じた。△そのため、もっと時間をかけて説明を聞いたり展示物を見たりできるとさらによかった。
- ◎ 自分自身がもっと地域のことを理解して、これからの子どもたちに何を伝えて行けばよいかをこれから考えていきたいと思った。
- ◎ 歴史史料の説明だけでなく、展示された史料を使って授業構想を立てる講座は変化がありよかった。
- ◎ 授業に役立つようにとの配慮がいろいろな所に見られ良かった。史料に忠実で、研究に取り組んだことを伝えようと工夫する学芸専門員の姿に、教職にある者として多くのことを学んだ。
- ◎ 展示物紹介だけでなく、授業での生かし方、人間の生き方まで学ぶことができた。
- △ 鹿児島県の歴史や展示史料についての講座内容はおもしろいのだが、それを授業でどう使うかとなると難しさを感じた。
- △ 教科書で学習したことぐらいしか覚えていないので、展示物を見て受講者が発表する形式ではなく、展示物を見ながら学習していけるような形式がよかった。
- △ ワークショップが割り当てられた部分しか見ることができなかったので、できれば満遍なく説明を聞きたかった。(歴史認識を深めたいという思いで参加したため、この形式の講座方法は困ってしまった。)
- △ 「この史料を授業でどう生かすか。」というテーマは困った。自分の知識が十分に備わっていない中で、史料を生かすレベルまでは考えが及ばなかった。

以上の成果と課題から考察すると、黎明館の活用の仕方についての教師自身の意識改革が図られてきたと言える。授業を通して、子どもたちを育成していく教師だからこそ必要な視点をもっただけだったことは、本講座の内容・方法改善を行った当初のねらいを概ね達成できたのではないかと感じる。しかし、まだまだ多くの課題も山積している。時間と内容のバランスや、本講座に臨む受講者の意識等については、今後も検討を重ね、講座自体の内容・方法改善のみならず、事前に、講座自体の本来のねらいを十分理解していただくための広報活動の在り方等まで考えていきたい。

